⑥

岩手県山田町／長根水産 長根徹さん

評判の〝鮭のフレーク〟を作り 軽トラで小売業にも進出

陸中海岸の釜石と宮古のほぼ中間にある山田町で水産加工業を営む長根水産は、長年卸売りが中心で、小売りはほとんど行っていなかった。震災後軽トラの調達を契機に、地元住民に積極的に関わることに。同社にとって新たな転機となった。

岩手県下閉伊郡山田町で水産業を営む長根水産社長の長根徹さん（45）は、震災後、軽トラを使って移動販売を行うようになり、いままで味わうことのなかった刺激を感じているという。

慣れない小売りに軽トラの移動販売で挑戦する

震災前はスーパーや商店に卸す仕事が中心で、消費者との接点はほとんどなかった。

「卸業者さんとの付き合いのみで、手堅い商売ができていたから、小売りを強化する必要もなかったのです」

長根水産は鮮魚のほか、乾物や缶詰などの加工品を手がける。なかでも好評なのが鮭のフレーク。骨取りや瓶詰などをすべて手作業で行う、鮭は地元産しか使わない、などのこだわりが、固定ファンを生んでいた。

「震災後しばらくは先のことが考えられない状況でした。夏ごろから落ち着き、商工会にも相談し、加工業を再開しました」と長根さんはいう。工場復活にあたって、商品の納入や原料の運搬などで、軽トラがどうしても必要になる。とはいえ、新たなコストをかけて軽トラを調達するのは避けたい。長根さんはそこで、商工会による軽トラ貸し出し事業への応募を考えた。

だが、貸し出しの条件を見て、長根さんは逡巡する。

「復興屋台村への参加や仮設住宅への移動販売を行うことが貸し出しの条件として書かれていたのです。要するにモノを売るのが貸し出しの条件、ということ。一瞬、戸惑いました。というのも私には小売りの経験がほとんどない。それどころか、自分は口下手で、お客さんとの交

鮭フレーク工場の向かいには鮮魚の加工場があり、そこでパック詰めされた魚は店頭で販売されている。新鮮かつリーズナブルとあって遠くから買いに来る人も多い。なかでも人気のスルメイカは朝のうちに完売してしまうほど。

流は苦手だという自覚がありましたから」

しかし一方で、被災者から聞こえる「新鮮な魚が食べたい」という声に自分が直接応えたいという気持ちも芽生えていた。

お客さんの生の声をもっと聞き出そう。長根さんは軽トラを調達して移動販売を始めることを決心した。

長根水産のある山田町は、岩手県の海岸沿い。南の釜石、北の宮古のほぼ中間点にある。

同社は山田町のなかでも船越地区というところに位置する。最寄駅は陸中海岸を縫うように走るＪＲ山田線の岩手船越駅。現在山田線は震災で不通となり、復旧の見通しは立っていない。

この駅は、船越半島の付け根にある。船越半島が巨大な頭だとすると、北に山田湾、南に船越湾という２つの湾に挟まれている駅周辺の一帯は、ちょうど半島につながる細い首にあたる場所だ。

津波で自宅と工場が流出。同じ場所に工場だけを規模を縮小して再建した

鮮魚や水産加工品を積んで仮設住宅を回って聞こえてきた毎日の暮らしの要望に応える

自宅兼工場は、〝首〟の南側、船越湾の沿岸にあった。津波で工場兼自宅は流された。現在は工場だけを縮小して建て直し、家族は仮設住宅で暮らす。

軽トラで仮設住宅を回ってみると、足回りを奪われ、買い物に出られない人が圧倒的に多いことを知った。長根さんが商工会からの軽トラ調達を断念し、移動販売をしていなかったら、わからなかったかもしれない実

「軽トラ導入をきっかけに、本格的に小売を始めることにしました」と話す長根徹さん

「仮設住宅で暮らす人のなかには、朝食には必ず魚を食べたいという人も多く、毎日配達しているんですよ」長根さん。軽トラでお客さんを回ったからこそ顔なじみのお客さんが増えた。

長根水産の加工場ではほぐしや骨取りといった工程がすべて手作り

態だ。

「しかし、こういう方々へのニーズを完全に満たすまでにはまだ至っていません。現時点では、電話での注文に応えて配達している段階。今後はもう少し、軽トラそのものを仮設店舗のように機能させて、住民を集め、住民同士を交流させたいのです」

震災を契機にした工場の再興は「ほとんどゼロからの再スタート」だったと長根さんはいう。工場が流されてフレークが作れなくなり、その間にスーパーの棚を競合業者に取られてしまったりもした。

「そこはシビアな世界です。スーパーの棚を取り戻すためにも以前よりもっとおいしいフレークをいろいろ作っていきたい。そのためにはお客さんの声を聞くこと。そしてそのためにも軽トラでこまめにいろいろな場所を回ることが必要だと、いまは考えています」

「お客さんの声を商品開発に生かしたい」と長根さん

山田町の水産加工の伝統を次代に託していきたい

長根水産は、岩手県内で唯一魚のフレークを製造している。使ってきた魚はいままではサケだったが、サバやメカジキなど新しい魚にも挑戦中。製品開発で試行錯誤が続くが、これも震災がなければ味わえなかった新たな刺激だという。

長根さんは今年から高卒者の新入社員を募集することも計画している。

「山田町を支える水産加工の仕事に関心を持ってくれる若者が増えてほしい。地域に根差して働く人材を育てたいんです」

工場再開時にも、真っ先に行ったのが以前働いてくれていた人の再雇用だった。みんな水産加工の仕事に誇りを持っている。その誇りを次代に引き継ぐために、若い戦力を迎えようとしているのだ。

地元産業の後継者育成役を買って出た長根さん。今日もお客さんの声を聞きながら、軽トラで点在する家々を回っている。

移動販売をしてみて、買い物に出られない人の多さを知った

40年以上も続く定番商品の鮭フレークには熱心なファンが多く、遠く大阪のお客さんから生産再開を祝う手紙が届いたという。また、フレークを贈った小中学校の子どもたちからもたくさんのお礼のメッセージが寄せられたそうだ。